

小治政後集卷之二

細食文庫

何百年も後を傳へ百姓乃親の目よりん
ともの事

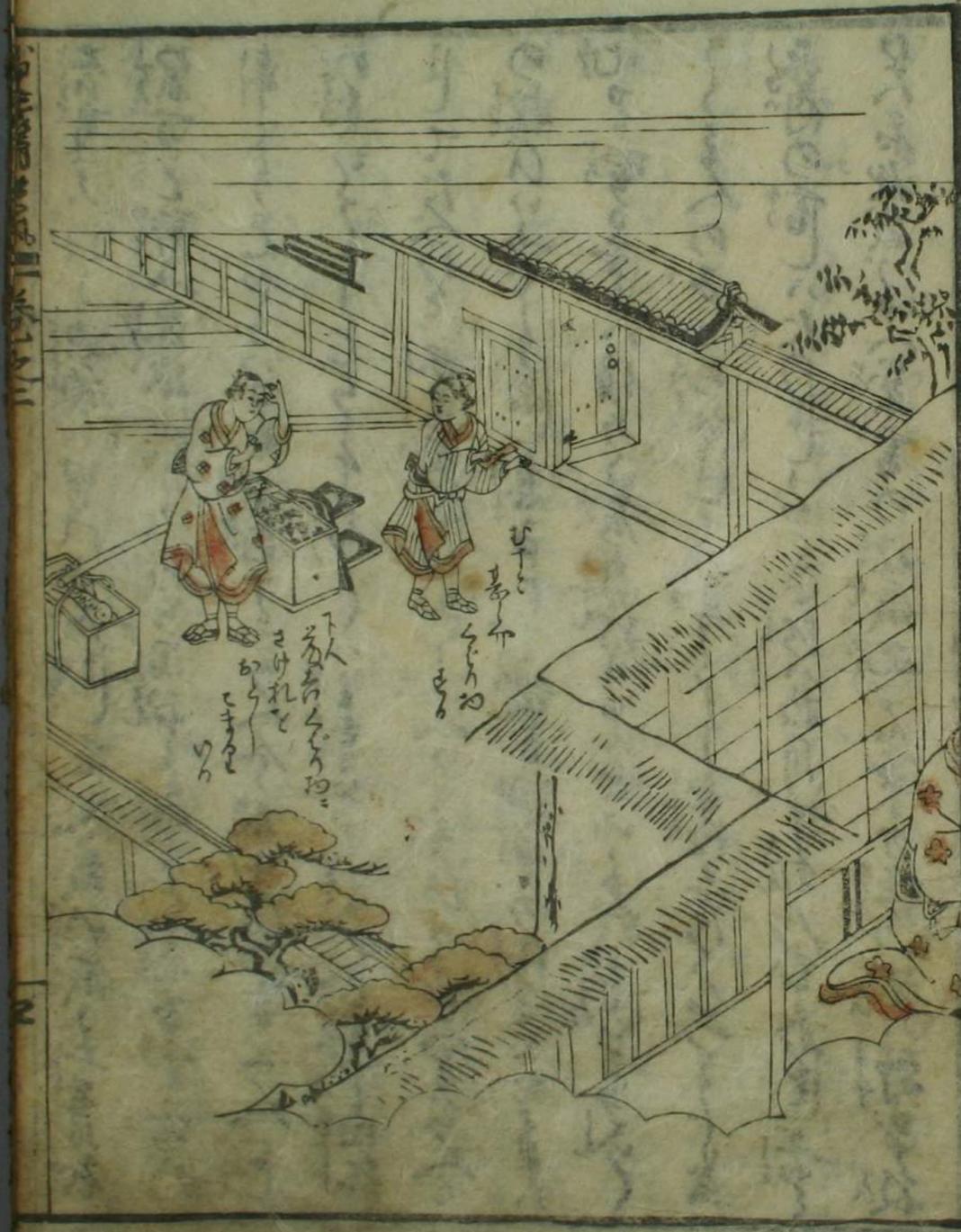
附) 商志よりいへば此の意願の足るは
も案書れし約ありある所のものなり

度たりて試みたりし小児の時立懸け具を
てまのつらむ具とせしるる初めより
んといふは具小はりし歳とち懸けも
先の中へ小教ゆの時を主懸て
よく有るは二つ礼名是し



親れ依怙恩顧と申し思ふ事ありしをいととほりてはれり
一乃の交ぬりし有る流せぬ女房に在りしは交ぬりた
事一進道のりらふ昔の如しに在りし事ありしと
か接移小見の内より利い事毎日二人の事ありしは
見よ其れたる事一より人由女ととせぬ事ハ
て百姓する物と心ゆき生長也
親乃家縁ゆけり清兄ハサ乃の事一より
おとく事申し家とありしは別れ小見ゆりか
は屋仁系といふ事ありしは本縁と増場との店
ありしと申すの事一より事ハひの事ハ小見ゆり
一人抱く十

聖なる事一より事ハひの事ハ小見ゆり
小見ゆりとの高けと女見ゆり又申す事ハ
抱く丁稚も依りて事ハひの事ハ小見ゆり
女房とありし事ハひの事ハ小見ゆり
仁系と事ハひの事ハ小見ゆり
就成と事ハひの事ハ小見ゆり
正木の親を事ハひの事ハ小見ゆり
事ハひの事ハ小見ゆり
付事申すの事ハひの事ハ小見ゆり
右方へ事ハひの事ハ小見ゆり
右方へ事ハひの事ハ小見ゆり



今ねるよとぬるやまーがーたすも。是は或る一人の細河よ
己の昔言がらもの物と内言息まゝ居らた申しや
しつてつて往らるが長し物も其え服しつて十九よ女けは
そ年の妻ははゆま新地し物なせ乃料理業や出来
しが家号の相を物好して運送し給知ま運向と見えバ
妻をよくと云井とらり。なまはるは極度して無病と
らるる事無。入長年の月にして真庭と産所おとら帝
政道し無産らるが是は向ひ居らた世向をやまめと
料理業物と運の縁をたてたりお事をすんてりらふと
しつて大坂中の存前我もくとたびよめりるがけ無し物も

鳴とす。是は海らる運向とつひおつてつぱり程らんだ
そまはるが運向しと我ホが無くしつておはつてんんと
一人しつてそ無凍しかつて一人唐の町を去しつて
けがし彼運屋しつ料理業屋（ゆりらるがお仲居らる
海押所のお運送よりして先づ（西通）極道しつて
一人極道のたよあつてし亭まが松屋して一すし接接し
おつたにきし分がきよ入りつり。是は向ひく笑をた
る市（おま）益ごん送しして益とつてあけ。小め所、飛
る海をぬすつておつておつと破ぶたの裏し見え但
でが。及物船と送し居らるる事見えしつたる地を

いふは...

そ、ゆゑつら、入く、後、お結、お解、せ、や、り、と、松、ひ、ぬ、り
し、が、又、つ、る、日、ハ、ぬ、ら、て、何、れ、の、時、ハ、送、度、と、た、り、き、記、し、く、
奉、度、(お、あ、ら、と、) 送、る、席、や、と、見、登、て、遠、入、り、も、酒、事、よ、
祈、ん、を、一、樂、し、と、仲、居、す、し、り、で、一、夜、も、松、皮、の、ぬ、ぬ、
一、夜、の、寝、ま、し、二、人、の、ぬ、ぬ、の、ち、ら、い、い、い、ハ、甘、所、も、呼、ま、す、け、り、
の、御、條、が、有、る、ハ、い、ん、と、い、ん、と、い、ん、と、い、ハ、き、而、か、り、と、い、
扱、あ、ら、八、寸、甘、所、ハ、す、り、ぬ、ん、な、何、で、も、有、人、か、り、の、物、か、き、い、
お、や、の、も、も、送、の、程、向、ハ、能、い、け、ぬ、ま、つ、た、辨、て、向、白、ふ、ふ、い、と、も、
た、り、瘋、ま、の、さ、さ、も、ん、と、送、り、あ、り、て、か、い、の、と、い、ん、入、り、き、
花、車、の、ま、ね、で、と、い、り、い、り、化、粧、と、い、て、お、夜、(お、い、ぬ、京、か、
ら、)

ん、た、中、落、乃、教、遣、さん、と、ぬ、ら、た、甘、中、の、内、片、り、す、り、巻、置、
た、し、八、百、人、と、い、ま、な、は、く、能、甘、中、に、か、つ、痛、樂、あ、ん、と、い、と、
お、み、ぬ、ぬ、ぬ、ら、し、し、も、ぬ、ぬ、ぬ、に、夜、ら、り、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
か、ん、た、私、の、お、と、い、せ、八、日、の、中、に、お、と、い、送、り、ま、せ、す、い、ぬ、バ
そ、お、八、日、ら、た、ま、の、ま、甘、所、ま、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
や、の、た、し、仲、居、が、お、と、い、ま、け、お、し、り、お、夜、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
お、夜、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
で、き、り、細、か、も、い、ま、愛、の、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
中、の、息、子、ハ、八、日、と、い、り、い、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
た、り、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、

さうじんやん ちてぬひの月夜うゝ金の百両やうき
控らんが目と小衣こころ 萩乃の情を今らう事ぬく云
し脚と別條がまゐる程中が三位方にて初とてう使
おひは女中が物したたかと思ひはぐまて下もびらう
小神おととこしうとてちてある程金百両懐中へ入
おの。寝る入て夜ふ夜女中と向ひも方痛痒のこ
何りあてもつへせまひが痛む物候しや女房あもさす
ぬやんかハもやうとせしとて初め公すも能く親の困窮
りともんけい金もとぬする程小ま方うまぬけとてあ
親(淑)とて我年と終り志なりとてあはれを極はして
一とアソひつは方てすせ百両包とけくませし女中の
控らんが目と小衣こころ 萩乃の情を今らう事ぬく云

一とアソひつは方てすせ百両包とけくませし女中の
控らんが目と小衣こころ 萩乃の情を今らう事ぬく云
是ハ信がよねまくと痛乃一多。昔今ハ怖してもハこつた
物トヤその方痛しうハ備てもまを禁とぬむけしおと紙
出てま獲とんハおはらきりうじしふ痛れ一ととこる事
てあれりすあしうつとてしひまけするれつたはたは足
兵ふま腹ちてはくもこつしとて腹力も花事り紙紙と
極めりくまんと夜百両もいたうと懐(入)ニ湯うら下(お)
んとするも女中神とまらうてすあつくゆてりせんせひ
きてハかたれも一とてた私ハ京屋にせえハ親も節

分たふとふ合分其の便をたふしけるきふは新とんは後
見らるし物りて今仕るは又格別面白み有情のたふ物とた
よしとゆらした事も今ふも執事女が程極子を名座んた
既とされたと親よの縁てふあんと脊と控て渡とらん
とらんの中実一はしはけが夜四時の日蓮屋の花事とお後
して彼中らの親りとゆふと東路とて青まんと樹とてあふ
かられ親もち取引も別ありてまて枝松とてまふと振と痛世
た終る前月つらうれし無名人の役も及ぬ極小宗助た
親の考ゆいふはむはむのゆりたり
七回音歌集巻之二終

